障害者の自立生活情報

ナンバー
No.７１

（２０２２年１１月号）

ナビゲーション

navigation

自立への道案内

今回、インタビューに協力していただいた東谷　太さん（右）
松﨑有己さん（元ナビゲーション編集長）（左）

もくじ

●シリーズ　いろんなテーマの「なぜ」を解消！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
●シリーズ　～Sevenメッセージ～自立生活センター・リアライズ　辻田奈々子さん・・ 10
●アクセス関西ネットワーク集会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
●おすすめのお店紹介します・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
●編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

シリーズ　いろんなテーマの「なぜ」を解消！

～なぜ、施設は作られ、なくならないのか

なくしていくために必要なことは？～

このコーナーでは教育、施設、交通など各分野に詳しい人にインタビューをしていき、当時の障害者や制度の状況、その制度はどう変わってきたのか？今、取り組んでいること、これからの課題はなにか、など語ってもらうというコーナーです。今回は大阪府岸和田市の自立生活センター・いこらーで活動されている東谷太さんに泉州地域の取り組みや、施設の状況、なぜ施設は、なくならないのかをテーマにお話しいただきました。

＜プロフィール＞
名前：東谷　太
所属：自立生活センター・いこらー
趣味：ＮＢＡ観戦、釣り

～泉州地域を変えていきたい～

山下：いろんなテーマの「なぜ」を解消という記事を昨年度から「施設」のことについて連載しています。今回は、大阪府岸和田市にある自立生活センター・いこらーで活動されている東谷さんにお話しをお伺いしたいと思います。今日は、よろしくお願いします。

東谷：よろしくお願いします。

山下：大阪市で活動をしていて、なぜ泉州地域で活動するようになった経緯を教えてもらえますか？

東谷：1994年から9年間、自立生活支援センター・ピア大阪（大阪市東住吉区）で活動していて、2003年から自立生活センター・あるる（大阪市都島区）で9年間活動していました。いつもお話しするんですけど、1994年の頃は地下鉄の駅に設置されているエレベーターの数も少なかったけど、18年の間に、ほぼ全駅利用できるようになって、大阪市内に自立生活センターがたくさん増えて、自立障害者も増えて、自立生活センターに関わらない障害者も当たり前に電車に乗って外出する姿を目の当たりしました

山下：大阪市内では重度障害者が自立生活を獲得するのが当たり前になりつつありますね。

東谷：それが、自分が長く育った泉州地域を振り返った時に、やっぱりまだまだ、外出する障害者は大阪市ほど多くないんです。施設に入っている人も多いと思います。重度障害者は施設に入るか、家族が抱え込むケースが多いと思います。僕も、障害者になってから、泉州で暮らしていたと言っても当時は寝たきりやったし、外に出ていたわけではないので、泉州の状況をすべて知っているかっていうとそんなことはないんです。でも明らかに大阪市と泉州では違うと思っています。18年間大阪市で活動してきて、もう大阪市で自分のやれることはやり終えたんじゃないかと思っていたし。まだまだ泉州が遅れているということにジレンマを感じていて、大阪府泉大津市で自立生活センター・リアライズ（以下：リアライズ）を立ち上げた三井くんたちが泉州でこういう運動を始めてくれて、自分の中で、泉州でやりたいという気持ちが盛り上がってきて、それでやろうと。僕の育ったところは、リアライズと同じぐらいの位置関係のところにあるんだけど。泉州全体が良くなってほしいという気持ちがあったので、ちょっとでも南に展開していけたらいいかなと思って。全然、縁もゆかりもない岸和田市なんだけど、ちょっとでもリアライズより一歩南ということで岸和田市を選んで活動しています。もちろん僕だけの力ではできなかったことです。

山下：僕も岸和田市で育って、子どものころ、街中で障害者を見るということがなくて、見るとしたら学校の中で養護学校とか、そういう所でしか見ることがなかったです。

東谷：泉州に帰って来た時の印象は、外出している障害者は、いつも集団でいてるようなイメージ。どっかの作業所の集まりでとか。大阪市内みたいに。個別の障害者が町中にあふれているということはなかったね。車での移動が主流になっているのかなとも思います。

山下：僕もどこかへ遊びに行くとしたら親の車で出かけることが多かったです。では、次の質問です。岸和田市内の施設の状況を教えてください。

東谷：岸和田市内に5か所施設があります。人数でいうと相当な人数やと思います。1つの施設に40人ぐらいは、いてるんちゃうんかな。もっとおるかもしれへんね。どの施設もけっこうな山奥にあると思うけど。1つの市に5つも施設があるって多いよなぁ。施設を求める運動が地域にあったからやろうね。

山下：5か所は多いですね。たまに、岸和田に帰ると施設の車が駅に停まっているのを見かけます。泉州地域ならではの取り組みはしていますか？

東谷：僕らが考える当事者運動は、なかったんちゃうんかな？リアライズが始めてくれて、いこらーを立ち上げて、阪南市にもあったし、リアライズさんができたことを足掛かりに発展していこうと、岸和田市のことでいうと、いこらーが当事者運動を唯一やれてるんじゃないかなと思います。

山下：泉州地域で活動していて、運動の難しさ課題を感じることはありますか？

東谷：身体障害者の当事者運動の部分でいうと、なかなか、なかったと思いますが、だからこそ、いこらーを立ち上げようと思ったわけだし。自分たちが活動することで当事者性っていうのを、地域の人や行政であったり、いろんな場面で示すことはできていると思う。まだまだ微力やけど。いこらーができたことによって、当事者の立場としての意見を地域の人であったり、行政とかに示していくことはできているように思います。

総決起集会後、デモ行進の様子

～人と繋がることができた だんじり祭～

山下：いろんな、反響というか、地域の人から知ってもらえている実感はありますか？

東谷：岸和田市には全国的に有名な「だんじり祭」があって、車いすユーザーを対象とした岸和田祭の観覧ツアーをやらせてもらって9年になります。この2年ほどは、コロナで止まっているけども、年々周りの人に受け入れられているということを感じるし、毎年こういうことをやっていくために、祭禮関係の人と話もさせてもらって、すごく理解を示してくれているし、そういう関係性を引き継いでいってもらえているのを実感します。

山下：ちゅうぶからも毎年、何人か参加させてもらったことがあります。ありがとうございます。

東谷：こちらこそありがとうございます。今年もよろしくお願いします。それで、岸和田市の制度のことでいうと、いこらーが立ち上がった頃、岸和田市の移動支援のガイドラインが示されて、それがとんでもないものだったので、そこを改善するために当事者の立場で発言したりとか、地域移行という部分では、まだ、それこそ指定相談支援事業所とヘルパー派遣をやっているだけだったけども、自分から積極的に働きかけて自立支援協議会に参加させてもらうようになったんです。

山下：自立支援協議会の中で、どんな意見を言ったりするんですか？

東谷：当事者としての意見をどんどん出させてもらって、地域移行取り組みをやりませんか？せめて入所者に対するアンケートをやりませんか？と働きかけて、自立支援協議会の運営会議の場でそのことを提案して、アンケートを作ってみたりとか。大阪市で活動してた時に、大阪府の地域移行モデル事業があったので、その時にこんなことをしたということも伝えて、岸和田市でも地域移行取り組みをしていきたいと話していました。1年後ぐらいに年末給付金を廃止するということになって、そのお金の一部を使っ岸和田市独自の地域生活移行支援事業というのを創設してくれたんです。

山下：そういう働きかけをしていて、いこらーがその担い手として選ばれたということですね。

東谷：そうですね。当事者としての意見を言い続けた成果だったし、いろいろタイミングとかもあると思います。タイミングが来たとしても、そういう働きかけをしていなかったら素通りするだけやからね。それは、主張してて良かったと思っています。あと、車いすユーザー限定のだんじり祭見物ツアーとかも。そのツアーも僕が 1人で頑張ってやったわけではなくて、社会福祉協議会の人とか祭禮関係の人とかと繋がったからこそできた運動で、その人たちに「車いすユーザーは、やり回しを近くで見るのを一生諦めている」とボクは言ったみたいで、その言葉にショックを受けてくれたんです。そうやって何年も運動してきて、一緒にやっている祭禮関係者が僕と同じ熱量で車いすの人の立場のことを考えてくれていると感じる場面が何度かあって、それが嬉しかったし、細かい小さいことから積み上げていくことが大切やと思いました。

山下：ツアーの場所を広げていく計画はありますか？

東谷：岸和田市には、いろんな地区があるので。僕らだけで全部の地区をやるのは不可能やけど、僕らのやっている活動が波及していって、その場所場所で形作られていくっていうのが必要なことで。実際に出来てきているんですよ。車いすユーザーの席を設置してくれる地区ができてきたり。

山下：どこでも車いすユーザーが観覧できるようになったらいいですね。

東谷：そういう活動をしていきたいと思っています。見に行くことを諦めてしまうことがないように。

山下：施設の人は、観覧席で見ることはできるんですか？そういう取り組みをしてるんですか？

東谷：案内は行ってると思うんやけど。施設から来てるということは、まだないね。岸和田市においては、施設入所者がガイドヘルプを使えるのは、地域移行を目的としている人しか使えないというルールがあるので、それは問題やと思うね。改善していくように働きかけていかないとダメやね。

山下：外出するということから自立の思いが生まれてくるし、そのきっかけ作りには外出は大切やと思います。次の質問に移りたいと思います。東谷さんが関わったケースとか、どんな風に地域移行したのか、や課題があれば教えてください。

毎年行われている、車いすユーザーを対象としただんじり祭にわか歩きツアーの様子

～地域移行があることを知ってもらう～

東谷：いこらーを始めてから地域移行したという人はそんなに居るわけではない。泉佐野市の施設からご自宅に戻ってこられた方や救護施設に入っていた車いすユーザーの方が一人暮らしする時のお手伝いをさせてもらったくらいで。2人とも自立生活を楽しんではると思います。地域移行取り組みをする時に、工夫してることは、基本的に外出支援から始まって、ＩＬＰを重ねて体験宿泊とか、地域で自立する人の場合と同じことです。外出企画の中でどんな風に介助を使うのかを見極めたりもしています。体験宿泊をしたりするときは特に、施設の協力が必要で、施設を巻き込んだり、応援してもらうことが大切ですね。

山下：施設職員への説得は難しいですか？

東谷：そこに行政も巻き込むんです。さっきも言ったけど、岸和田市では、地域移行を希望する人だけしかガイドヘルプ制度が使えないので、行政にも施設に一緒に行ってもらったりしました。岸和田市の自立支援協議会の中に地域移行部会があって、その地域移行部会の取り組みとして、施設職員を対象とした、地域移行の学習会を何度か開催したり、毎年、地域移行部会の1年間の活動を、施設で報告会をしたりとか、情報共有をすることによって職員の意識改革というか。職員に地域移行というものがあることを意識してもらうことを取り組んできました。

山下：話が戻るかもしれないですが、僕は養護学校(現:支援学校)を卒業した後、障害者の職業能力開発校に行ったけど、重度障害者の人達は施設に行く人が多くて、先生が「卒業したら○○の施設に行くんやね。おめでとう」と言ってる先生がおって「これは、本当におめでとう」なんかなと思ったんです。学校を卒業してすぐ施設ではなくて、地域でっていう働きかけは、していますか？

東谷：やったことがないわけではないけど、ちゃんとはやれてないですね。学校に訪問して自分たちのことを伝えるということもこれからですね。今、いこらーの作業所に支援学校を卒業した人が来てくれているので、そういう繋がりができたから、これからはやりやすくなると思う。話は変わるけど、地域移行部会の話の中で、施設入所している人で、「地域移行できる人、できない人」みたいな、ものさしが出てきたりするんです。その度に、それは違うと言うんだけど。

山下：現実的に簡単かどうかは別として、それで、できる人できない人に分けるのは非常に間違ってますよね。

東谷：僕らに力があるかどうかは置いといて、それが最初に言うてた泉州の現実ですね。山下くんが言うてた「重度の障害者はみんな施設が当たり前。」「施設に行けたらラッキー。」待機障害者がたくさんいて、なかなか施設に入りたくても入れない人がいる。だから、重度の人が施設に入れると「おめでとう。」になっていくんやよね。それは間違ってるよね。

山下：そうですね。

東谷：最初の話に戻るけど岸和田市に来て驚いたのは、障害者が集められているということです。支援学校もそうやし。校区外の

学校に集められる。岸和田市って広いのに、遠い地区から来るためにタクシー代を行政が出して、無理やり１つの学校に集められる。異常やね。それがまかり通ってるんよね。

～当事者のことを当事者が変えていくことが障害者運動～

山下：障害者が集められているのが現状ということですね。

東谷：そうやね。集められることに反対する人も少なからずいるけど、主流はそっちやね。本当にそれが泉州の現実やね。地域移行部会として、施設の職員と連携しながらやれてはいるんだけども、施設の職員に地域移行を希望する人いますか？みたいな問いかけをするけど、今のところゼロです。と答えが返ってくる。

山下：アプローチできていない状況ですか？

東谷：前は施設に訪問して茶話会を開いて、自立生活のビデオを見てもらったりしたけど、今はコロナで出来なくて。希望する人が出て来るのを待つという状態。でも、こちらから施設に出向いて行って、いろいろな働きかけをして希望する人を作り出していかないといけない。今後の部会としての地域移行の課題だと思っています。今、施設に入ってる人は 2年ぐらい外出してないと思いますね。ただでさえ自由に外出できないのに、すごくストレス溜まってるやろうと思うね。

山下：コロナの前と後の関わり方は変わってきてますか？

東谷：1年以上、地域移行取組み中の人と関われてないから、また振出しに戻る感じがありますね。今まで積み上げてきたことが１からやり直さなアカンという気持ちです。

山下：大阪市と岸和田市では、当たり前が違うと思いますか？

東谷：そうやね。なぜ泉州に戻って活動しているのか、それは山下くんも言ってたけど、泉州と大阪市とでは当たり前が違うんですよ。障害者が集められることであったり、重度障害者は施設に入れられる。この地域に蔓延している当たり前を変えていくことが我々の運動だとすごく感じています。大阪市は重度障害者が街に出ることが当たり前になってるよね。でも、その当たり前が泉州地域では通じなくて違うものになっているんです。泉州地域の当たり前を変えていきたい。運動の根本やね。当事者のことを当事者が変えていくことが障害者運動だと思っていて、地域の課題を変えていくのは地域の障害者だと思います。健常者も含めて、その地域の人が「自分たちの地域はまだまだ不十分だ！変えたい！」と思ってくれる人を増やしていかないと変わらないよね。

山下：そうするためにどうするか、考えていく必要があるということですね。

東谷：そのためには、僕らがもっと元気にならなあかんよね。最近、忙し過ぎて元気がなくなってきてるから。（笑）元気にならないと周りに影響を及ぼすことができなくなるよね。ここに関わってみたいと思ってもらえる空気を僕らが作っていかなアカン。泉州トライを 10年ほど前にやったけど、地域の人たちに障害者のことを知ってもらう活動を今後もしていかなあかんよね。

山下：本当にそう思います。僕も、いい歳になっ

てきて、若い人に負けてられへん！いろんなことを伝えていかなアカンから元気でいようと思います。伝えるという意味では、相模原事件から 6年が経ち、同じようなことを起きないようにするためには、当事者は何をすべきか、何を伝えていくべきだと考えますか？

東谷：犯人が、コミュニケーションがとれない障害者は生きていても周りに不幸を与えるだけだと言ったらしいけど、僕らからするとそんなことないわけやよね。

山下：彼はもともとそこで働いていた職員だったけど、障害者と関わりがなかったわけじゃないですよね。

東谷：障害者に生きている価値がないと言っている。そんな価値をお前が決めるな！という話。分離させることから弊害が起こるんよね。僕ら自身の中にあるそういう線引きがあってはいけないと思います。僕らがなくしていく努力をしないといけない。

山下：さっき言った地域移行できる人できない人を分けてはダメと思いながらやっていく必要があるということですね。

東谷：分離教育であったり、分離の社会を進めている以上、こういうことは繰り返されることやから、それを少しでも早くなくしていく必要がある。もし施設に入っている人が全員、地域に戻ってきたらそういうことも減っていくと思う。街に障害者が溢れるわけやけど。どの地域でも街に出たら、障害者に必ず出会う社会になればいいと思うし、地域移行と話はつながっていくなと思う。もし仮に施設に入ってる人が十分なサポートがあって、あたりまえに地域に戻ってこれる社会が作れたら、あんな事件は起こってないと思うなぁ。

～まだまだ障害者は集められている～

山下：学生時代から、障害者と関わることは大事なんかなぁと思います。最後の質問をさせてください。今回のメインテーマのなぜ施設はなくならないのか？東谷さんの考えを聞きたいです。

東谷：う～ん。難しいテーマやね。あくまでも僕個人の意見として聞いてほしいんやけど。施設が安全だと思っている人が多くて、障害者は、まとめられてもいいと思っている人が多いということじゃないかな。学校が集められるのも一緒で、効率よく支援をしようとし過ぎやよね。そこでは本人の想いは置き去りになっているよね多分。地域で暮らせないけど、施設なら大丈夫というのはなんで？と思うよね。施設は24時間誰か職員が配置されているからそう思うのかな。でも、入所者の数に対して充分な数の職員配置がされていないから、ある程度放置せざるを得ない状況になるよね。あと、入所者一人一人の個別の希望を聞き入れていたら回らなくなるので、画一的な支援にならざるを得ないよね。ということは、待たされたり我慢したりが日常的になっているということやけど、それは「仕方ない」で済まされていると思う。施設が必要だと思っている人は、そういう部分は「仕方ない」で良いと思っているということになるよね。「地域移行できる人、できない人。」という話がでて来るたびに考えさせる。だったら、施設の配置基準を手厚くして予算を付ければいい。ということに

なるのかも知れないけど、もし仮に、施設でも地域でも手厚い人的配置が同じようにできたとしたらどうなるかと言えば。

山下：施設の維持管理費や人件費がかかりますね。

東谷：そうやよね。どちらでも同じケアができるなら、施設の維持管理費の部分は無駄やよね。それなら当然、地域で暮らした方が良いに決まってるやん。施設のほうが安心安全というのは、その代わり、本人が望む暮らしができないのは仕方がないで良いと思ってるからやん。

山下：待たされるということが、それこそ当たり前という考え方ですよね。

東谷：それがええと思ってるということやん。本当にその人が必要なケアを受けられなかったとしても、施設に集めて効率的なケアをすることが良いと思ってる人が多いということやん。安全だというけど、クラスターは起こるし、虐待も起こるし、相模原事件のようなことが起こってしまうわけ。安心安全とも言えないよね。

山下：やっぱり、障害者は集めたほうが効率良いという考え方は、変わらず残っているんですね。

東谷：そうですね。実は今年、3年ぶりにだんじり見物ツアーを再開することが出来たんやけど、応募してくれた人の中のあるお母さん 2人が「施設に入っている子供が、もう 2年近く外出できていないので、ぜひ参加させてあげたいと思っていて、施設側に相談しているので申込締め切りを待ってほしい。」という相談があって、結果どうなったかというと、「最近施設内でクラスターが起こって他の入所者には面会もお断りしているので難しい。」と施設に言われたので断念します。と非常に悲しそうに仰ってました。その連絡をもらって僕は、とてもやるせない気持ちになりました。このままコロナ禍が続いたら、ずっと外出させないつもりなのか？入所者の人権はどうなるのか！と憤りを感じたわけやけど。2年も外出できていないというのはどう考えても異常なことやよね。「外出不可」「面会不可」にしていてもクラスターは起こるということなら、何のための外出不可なのか？って思う。結局、集められているからこんなことが起こるわけで、これが地域で暮らしていたら、感染もしくは濃厚接触者となった期間、10日間ほどは外出できないけど、リスクがあるからといって 2年外出できないなんてことはないからね。こんなことを繰り返さないためには、まだまだ頑張らないといけないなぁ。とつくづく思わされる出来事でした。

山下：東谷さんも、先ほど言ってたように、地域を変えていくのは地域の当事者やと思うので地域の当事者がその気持ちになってもらえるように働きかけることが大事ですね。今日はありがとうございました。

東谷：ありがとうございました。

～～～Seven メッセージ～～～

【プロフィール】

名前：辻田　奈々子

所属：ＮＰＯ法人自立生活センター・リアライズ

活動歴：リアライズでスタッフとして活動を始めて10年目

1. なぜ、今の活動をしようと思ったのか？（関わるきっかけ）

私は大阪府南部にある泉南郡熊取町という長閑な地域で生まれ育ちました。幸い、施設入所の経験はありませんでしたが、生まれた頃から大学３回生まで実家で家族のサポートを受けながら生活してきました。学校は当時でいう養護学校ではなく、地域の普通校に通い、毎日母親が車で送迎をしてくれていました。通学に利用できる公的なサポートがなかったため、母親が決まった時間に送迎する日々が続いており、それ故に授業以外で友達と過ごす時間や部活動などに励む時間はかなり限られていました。閉鎖的な地域で障害児のサポートは家族が丸抱えするのが当たり前という風潮が根強いなか、自分と同じような障害のある人たちがどのような生活を送り、どのように人生を切り拓いているのかを知らぬまま日々を過ごしてきました。

家族が歳を重ねることで通学はもちろん、日常の介助も厳しくなりつつあった大学１回生の頃、同じ骨形成不全症の当事者で大学のＯＢであった三井(前リアライズ代表)と出会いました。その頃、自立生活運動はおろか自分以外の障害者の存在すら知らなかった私は、同じ病気の当事者がこの世に存在していることにまずは衝撃を受けました！（笑）当時はまだリアライズは設立されていませんでしたが、三井からの「奈々ちゃんみたいな重度の障害があっても介助を使ったり、お家をバリアフリーにしたら、みんなみたいに親から自立して一人暮らしできるんやで！」という言葉に、その先の人生への希望を見出すことができました。三井を始め、リアライズで活動する障害者は誰もが生き生きとしており、介助を使うことで堂々と自分がその時にしたいことを発信し、健常者と対等に忌憚なくやり取りしている光景にカルチャーショックを受けました。それと同時に自分はこれまで障害を理由にいかにいろいろなものを我慢させられてきたか、諦めさせられてきたのかという事実に向き合わざるを得ませんでした。そんな仲間との出会いから徐々に自立生活運動にも関わるようになりました。学生の頃から授業をサボって障大連の総決起集会やセミナーなどに参加していた私は、そこで繰り広げられる先輩障害者の熱いアピール行動に胸を揺さぶられました。というのも、実は私の母親は若い頃から障害者のボランティア活動や部落解放運動に関わっており、私の就学時も教育委員会に直接掛け合い、普通校への進学を実現させるなど、声を上げることで本来の権利を勝ち獲る姿を幼い頃からこの目で見てきました。そんな環境で育ってきたからか、理不尽なことに対し強く声を上げる先輩たちの姿は、自分がこれまで教えられてきた社会の在り方や価値観、感性にピタッと嵌ったのです。こうして、自立生活運動に魅了された私は、本来の大学生活よりも仲間と共に過ごすこの運動に自分の居場所を見出していき

ました。

2.続けられている理由は？

やはり変化を実感できることです。障害者に関わる法制度が良くなっていくことはもちろん、街中のバリアフリーが進んだり、地域の人たちが自分たちのことを知って行動に繋げて下さったりと、運動により障害者にとって少しずつでも生きやすい社会に変わっていく光景を見ると、継続していくことの大切さを感じます。また、自立を応援している人や共に活動する仲間が、日々の活動や人との交わりの中で経験の幅が広がり、自信を取り戻していく姿を見るのもこの活動の醍醐味だと感じます。私自身もそうでしたが、まだまだ今の世の中は健常者中心社会となっており、地域から孤立していたり、自信を奪われている障害者が多いと感じます。そんな中でこの活動と出会うことで、社会における自分の存在意義を見出し、自信を取り戻してどんどん磨かれ向上していく姿は周囲の人たちにとっても刺激になると感じます。障害者が一人、また一人と自分らしく変わっていく姿に継続していく意義を感じます。

3. 活動をしていて気づいたこと（自分が変わったなと思う瞬間）

冒頭でもお話したように幼少期から友人関係を作りづらい環境にずっと身を置いていたり、地域の人たちと交わる機会が圧倒的に少なかったりと、あらゆる人間関係から遠ざけられてきたため、人に何か相談することや協力してもらうことにハードルを人一倍高く持っていました。全て自分で抱え込み、またそれで何とかやってしまえている感覚もありました。しかし、２年前に三井に代わりセンターの代表に就任し、いろいろな壁にぶつかってきたことで、物事を自分の力だけで推し進めていくなんてことは到底無茶だという事実に最近気付き始めました。（笑）今思えば遅い気付きでしたが、運動には人に相談すること、協力してもらうことが不可欠であることを考えると、今更ながら気付けて良かったと感じます。

泉大津TRYでの協力店舗

4. 今携わっている活動（仕事）の難しさと面白さ（醍醐味）

リアライズのバリアフリー推進の目玉の取り組みである「泉大津TRY Season2」では街中のバリアフリーを広げていくために自分たちが利用したいお店に募金箱を設置させて頂き、それと引き換えにスロープを寄贈させて頂くという活動を続けてきました。この取り組みは三井が設立の頃から構想していたもので、始めは自分たち内部のメンバーだけのものでしたが、継続していく中で地域のボランティア団体や学生さん、一般市民の方まで関わって下さるようになり、設置店舗も増えていくなど徐々に地域に知ってもらえる活動となりました。また、今年度より新たに「Viva泉州」という取り組みを始めており、高石市から岬町までの泉州地域における観光スポットや飲食店などのバリアフリー情報について実際に自分たちが現地に赴き、ＳＮＳ等でどんどん発信していこうと考えています。この取り組みには、小さい頃から海外など家族でたくさ

ん旅行し、いつかはバリアフリー観光に携わる仕事をしたい！という夢があった私にとって、特別な想いがあります。
障害者のことを知ってもらい、真の意味でインクルーシブな社会を作っていくためには、運動を知らない地域の一般の人たちをいかに振り向かせることができるか、どれだけ巻き込み、自分たちもその中に溶け込めるかが重要だと感じます。自分たちの生きづらさや権利性を伝えながらも地域の人たちとの距離を縮めていくことは本当に難しいですが、それが叶ったときの達成感はとてつもないと思います。

5. 活動していく中で大切にしていること（団体をまとめていくときに心がけていること）

人に頼ること、相談することです。「3.」でもお話しましたが、代表であるからといって全てを抱え込み、自分の持っている材料だけで判断しなければならないということはないと最近は思えるようになりました。自分は法人運営を担うようになってまだまだ日が浅いですし、自分の力だけでできることなんて僅かであると考えているため、一人で悶々とするよりも得意な人や経験が豊富な人の力を借りて物事を動かしていく方が遥かに有意義だと感じています。

6.読者に伝えたいこと

リアライズは新体制になり、２年と少しが経ちました。まだまだ未熟で皆さんのお力を借りることも多いかと思いますが、これからもどうぞよろしくお願いします！

7.座右の銘

「生きてさえいれば、全てがなんてことない」
私の大好きな、人生のバイブルにしている韓国ドラマ「梨泰院クラス」の物語終盤のセリフです。死の淵に立っている主人公セロイが天国にいる父と夢の中で再会し、父から投げ掛けられた言葉です。
生きていると辛いことやしんどいことの方が大半ですが、生きてさえいれば行動に変えていけるし、いつかは解決の糸口を見出せられる。リアライズのセロイとして、これからも仲間を信じて活動を展開していきたいと思います！

３年振りの障大連総決起集会でのメンバー集合写真

2022年度アクセス関西ネットワーク集会がありました。

みんな どこいこ！ 旅行いこ！ユニバーサルツーリズム

～みんなが楽しい旅行のために～

10月12日（水）2022年度アクセス関西ネットワーク集会が行われました。
バリアフリーホテルが今回のテーマでした。
「大分・別府バリアフリーツーリズムの実践」と題してＮＰＯ法人自立支援センター・おおいた理事長の安富秀和さんをお招きし、自立支援センターおおいたの紹介や別府・大分バリアフリーツーリズムセンターのことなどについて講演していただきました。
安富さんの講演の中で印象に残っているのは、「行けるところより、行きたいところ」という言葉でした。例えば、店の入り口に段差があったら、その店を利用することを諦めて、行けるお店（入れるお店）を探す人も中には、いてると思います。本来は、障害者も行きたいお店に入れて当然です。お店の人達はスロープを設置したら店内に入れることを知らなくて「車いすだから。」「お店が混んでいるから（実際には混んでいない時もある）」と、入店拒否されることがあります。そんな時は、障害者が「スロープ設置してくれたら入れるよ。」など提案して車いすでも入れるということを伝えていく、知ってもらうことが大事だと思いました。
　2025年には大阪万博が開催され、たくさんの障害者が日本のホテルに泊まります。万博までに「誰もが利用しやすいホテル」や「また、行きたい。」思うようなホテルを増やしていく必要があります。そのためには、障害者が、ホテルのバリアフリーチェックをしていくことが大切だと今回の集会に参加して思いました。

【ユニバーサルツーリズムとは】

ユニバーサルツーリズムとは、すべての人が楽しめるように作られた（ユニバーサルデザイン）旅行のこと。ノーマライゼーションの観点から高齢者や障害者が主に参加できる旅行を、日本はバリアフリーツーリズム、欧米はアクセシブルツーリズムと一般に呼ぶが、ユニバーサルツーリズムは一歩進んで、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが気兼ねなく参加できることを目指そうとするもの。

【アクセス関西ネットワーク】

ＤＰＩ日本会議（障害者インターナショナル）が主催する「交通バリアフリー障害当事者リーダー養成研修」を関西で実施以降、関西におけるアクセスに関連する課題をゆるやかに共有していくネットワークを形成するために結成されました。アクセス関西ネットワーク集会は1980～90年代に実施されていた全国アクセス交通行動が実施されていた10月10日に思いを馳せて毎年開催しています。

おすすめのお店紹介します！

お茶処　なんてん

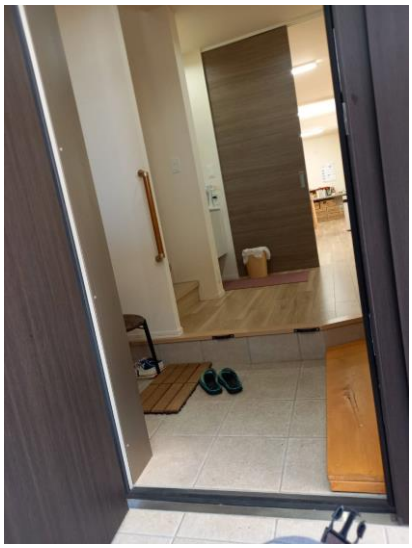
住所：大阪市東住吉区田辺6-1-27（田辺会館）
営業時間：月曜日～金曜日　7:00～17:00
　　7:00～8:00　こども対象（朝食）無料
　　8:00～10:00　モーニング300円
　　11:00～14:00　ランチ（日替わりメニュー）500円

今回は、大阪市社会福祉協議会に登録している団体の１つで民生委員の方が中心で運営している、「お茶処なんてん」を紹介したいと思います。今年4月にオープンした新しいお店です。

14時からは子どもから大人までが集まれる場所として提供しており、車いすの方も何名か利用されたことがあります。とのことでした。

お店の外観

入り口までは
スロープも設置されています。



入り口には段差がありましたが、スロープを設置してくれました。店内に入る時は、お店が常備している手動車いすに乗り換える必要があります。

店内は、とても広いです。車いすが、ゆったりと移動できる通路幅も確保されています。椅子は可動式で車いすのまま着席することができました。車いすトイレも設置されていました。

大阪市社会福祉協議会とは

大阪市社会福祉協議会（以下「市社協」と言います）は、「大阪市における社会福祉事業その他の社会福祉を目的とする事業の健全な発達及び社会福祉に関する活動の活性化により、地域福祉の推進を図ること」を目的として、昭和26年5月28日に法人設立されました。長年住み慣れた地域社会の中で、安心して暮らし続けるためには、公的な福祉サービスだけでは解決できない様々な福祉課題があります。市社協では、住みなれた地域や家庭で暮らし続けたいという高齢者や障がいのある人、子どもたちの願いを実現するため、「一人ひとりの人権が尊重されるやさしさとぬくもりのある福祉によるまちづくり」をめざし、区・地域（地区・校下）社会福祉協議会や福祉関係機関・団体と連携協調して、地域福祉・在宅福祉サービスの推進、ボランティア・市民活動の推進、調査・広報啓発活動の推進、大阪市施策の事業受託運営、障がい者支援事業及び介護保険関係事業の実施などを積極的に展開し、地域福祉の推進に取り組んでいます。（大阪市社会福祉協議会ホームページより抜粋）

編集後記

みなさん、こんにちは。大阪は朝晩だいぶ涼しくなってきました。しっかり食べて、しっかり寝て体調を崩さないようにしないといけませんね。さて、今回のナビゲーションはいかがでしたか？自立生活センター・いこらーや自立生活センター・リアライズと、泉州地域特集でした。いこらーの東谷さんとのお話の中では、記事には載せきれなかった地元のローカルな話題で盛り上がる場面もあり懐かしく思いました。僕は、大阪市で活動していますが、東谷さんが言っていた「泉州地域の当たり前を変えていきたい。」という気持ちに少しでも力になっていけたらと思いました。　【やました】

●各団体で企画しているものがあれば、当センターが発行している機関誌ナビゲーションに掲載してみませんか？ナビゲーションは 3月、7月、11月に発行しています。掲載する際、各企画のお問い合わせは当センターではなく、直接、各団体にお願いいたします。当センターにお問い合わせいただきましても、お答えいたしかねますので、ご了承ください。

●みなさんからのご意見、ご感想をお待ちしております。記事に対するご感想、日ごろ感じておられる疑問、こんな情報を知ってるよなど、なんでも結構ですので下記の連絡先までお寄せいただければ幸いです。また、突然、取材にお伺いさせていただき、ご迷惑をおかけすることがあるかも知れませんが、その際には、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-▽-▽

自立生活センター・ナビとは…

☆私たちの考える「自立」は…

働いてお金を稼ぐ事や身の回りのことを全部自分で出来るようになる事、それだけが「自立」でしょうか？もちろんそれも大切なことですが、できない事は人の手を借りたり、気持ちを上手く伝えられないときには仲間にサポートしてもらったりしながら、一人一人の生活を創っていくことも「自立」であり、色々な方法でお手伝いしていきたいと考えています。

☆地域で障害者の自立を実現していくための「道案内（ナビゲーター）」として、例えば「介護してくれる人を探しているんだけど？」「家の中をもっと使いやすくしたいけどどうすればいいの？」そして「自立したいけど自分には無理かな？」自立生活センター・ナビでは、こうした障害者や家族の悩みや相談について、障害を持つピアカウンセラーが同じ障害者の立場でお話を伺い、制度の説明や申請のお手伝い、住宅改造などのアドバイスをさせていただきます。その他、電動車いすで街へ出かけたり仲間と一緒に料理を作ったり地域で生活していく上で必要なことを、楽しみながら経験できる「自立生活プログラム」や、自立生活に関わる各分野の方々をお招きしてお話を伺う「自立生活セミナー」の開催、情報誌「ナビゲーション」の発行も行っています。

△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽

発行　自立生活センター・ナビ　　でんわ　06（6760）2671
住所　〒546-0042 大阪市東住吉区西今川2-3-8　　ファックス 06（6760）2672